

奈良出土青緑釉陶器瓶の産地・流通・ルート・用途・内容物・価値

佐々木 達夫・佐々木花江

はじめに

2009年、奈良からイスラーム陶器が初めて出土し、同年7月3日、奈良市教育委員会は報道機関にその事実を公開した。翌日4日、日本の全国紙や各地方紙も朝刊第一面及び文化面を使ってほぼ同様の内容を掲載し、古代日本の歴史と文化の解釈に影響を与える貴重な資料発見と報道した。筆者は奈良出土青緑釉陶器瓶をめぐるいくつかの問題に私見を述べたが（佐々木 2010）、本稿では新たに発見された資料を加えてさらに推測する。別稿でアール遺跡から出土した青緑釉陶器瓶を紹介し、奈良出土品に類似した青緑釉陶器瓶が西アジアでどのように出土するかを併せて紹介する。最初に奈良出土破片の写真をお送りいただいた奈良県立橿原考古学研究所の西藤清秀氏や、出土状況の説明をご教示いただいた奈良市埋蔵文化財調査センターの森下恵介所長や発掘担当者の久保邦江氏に感謝。

1. 青緑釉陶器瓶が奈良で発見される背景

日本は弥生・古墳時代から東アジアの物資を中国や朝鮮から受け入れていた。奈良時代になるとさらに遠隔地の西アジアの文化も中国経由で入るようになる。西にアッバース朝、東に唐という二つの大帝国が栄え、両地域を結ぶ海の交易路が盛んに利用され始めるのが8世紀後半から末の頃である。それまでもローマ帝国時代にイタリアやスペイン、アフリカ北岸を結ぶ地中海の交易が盛んであったように、地域内、文明圏内で物資を運搬することはあった。8世紀から一つの文明圏の範囲を超えて、遠く離れた文明間を結ぶ長距離交易が商人の活動や航海技術の向上で可能になったことが歴史上では重要な点である。

遠隔地から重い物資を大量に運ぶのは、季節風を利用した帆船が適していた。海のシルクロードと呼ばれる海上交易路を具体的に伝える考古学の発見品の一つとして、交易船に積まれた青緑釉陶器瓶が挙げられる。バグダッドを都としたアッバース朝（今のイラクが中心）の領土内で作られ、西アジアの都市では液体を入れる容器、あるいは液体を運ぶ容器として一般的に使われていた。村跡や町跡の発掘では一般的に出土する製品である。そ

れが交易船に積まれて、他地域にも運ばれた。航海中には中に物を入れて運ぶ容器（コンテナ）として使われたと推測される。そのため、この種類の瓶は、9世紀を中心とする時代にイラン、インド洋の沿岸地域であるアラビア半島、アフリカ東海岸、さらにインド、スリランカ、マレー半島西側などの地域の港町遺跡で発見されることが多い。バグダッドを中心に栄えたアッバース朝の交易圏を具体的に示す出土品としての価値が評価される。

2. 奈良で出土した遺跡の状況から推測できること

青緑釉陶器瓶の破片が神護景雲二年三月五日（768年）の年紀のある木簡とともに旧西大寺境内の溝内の木屑層とそれを覆う砂質粘土層から出土した（図1、奈良市埋蔵文化財調査センター 2009）。西大寺は、天平神護元年（765年）に孝謙上皇（のちの称徳天皇）の発願により創建された寺院で、瓶が出土した溝は寺内の通路側溝と推定されている。溝は幅7m、深さ1.5～2mで、中央部分はさらに一段深く掘られ、その幅2.5～3.7m、深さ0.9～1.5mである。溝の底に厚さ0.4mの焼却廃棄した木簡を含む木屑層が堆積し、その層から8世紀後半の土器、軒瓦、木簡などとともに瓶が出土した。森下恵介所長によると、溝は寺内の通路の側溝で、通路が拡張された際に溝は一気に埋められ、下層に水はけの良い木屑層を入れ、上を砂質粘土層で覆った。同時に埋めたため、上下の層に同じ青緑釉陶器片が含まれると言う。

出土した陶器の破片数は2009年7月の新聞報道時点で21片であったが、奈良市埋蔵文化財調査センターによると2011年1月時点で34点に増加した。肩部、胴部、底部の破片がある。釉は青色あるいは青緑色で、表面の釉は厚くガラス質で、風化しておらず、内面は黒緑色の釉がかかり、厚さは表面よりもやや薄い。表面の釉が厚く青緑色で、内面の釉が薄く、黒みや灰色みかかるとはこの種類の瓶の一般的な特徴である。釉を英語ではTurquoise glaze、中国語では波斯釉、翠緑釉、孔雀藍釉などと言う。西アジアで遺跡から出土する青緑釉は一般に風化・銀化して白っぽくなるが、奈良出土品は風化が進んでおらず、きれいな青色を残している。西アジア出土品は塩が破片に付着して固まり、破片を水洗いした後

は霜柱のように、あるいは真綿のように塩分が破片を覆うことが多い。保存状態は埋没していた土壌の性質に影響される。肩に波状刻文があり、残存部分では1本のみ確認できる。用いられた粘土は柔らかい黄色味かかる白っぽい粉状土であり、筆者がサマラ分類などで Creamy yellow fabric と分類する素地である（佐々木 1995）。ルーペを使うと石英粒が含まれているのが確認でき、空隙もかなり多い。この特徴はイラクの低地に堆積する粘土で、当時の高級な施釉陶器に使用された粘土と同じ種類である。ただし、最上級の粘土は Creamy yellow powdered fabric であるが、この粘土の製品の数量はきわめて少なく、碗などに用いられ、大型の瓶や壺に用いられることはほぼ無い。復元される形状は8世紀後半から9世紀前半のイラク南部産として良いものである。

奈良出土品は8世紀後半の陶器、あるいはそれより下らない年代と遺跡内の発見状態から年代が推定され、その推定年代の幅は限定されている。イスラーム陶器は同時代の組み合わせや年代的な順序はほぼ確定しているが、その絶対年代を判定する資料がきわめて少ないため、年代がほぼ確定できる奈良出土品はイスラーム陶器の編年研究にも有意義な資料となる。鴻臚館では同様な瓶を出土遺構の推定年代から9世紀とし、中国でも10世紀初の福州出土品を除いて、出土層位と共伴する越窯、邢窯、長沙窯の製品から唐代中晩期とし、世紀を言う場合は9世紀とする。奈良出土陶器は8世紀後半に奈良に到達していたことを伝え、初めての9世紀以前と言える陶器であり、奈良時代と同時代の世界との繋がりを考えるうえでも意義深い発見である。アジアの東西を結ぶ長距離海上貿易が始まった初期段階の8世紀後半と年代が推定できる陶器瓶であり、アジアの海のシルクロードの終点の一つが奈良であることを具体的に示す歴史資料として、その価値が評価される。

3. 青緑釉陶器瓶の産地と流通

いまのイラクの都市やインド洋沿岸地域で8世紀後半から10世紀前半を中心とした時代に一般的に見られた青緑釉陶器は、東アジアではきわめて希なものであった。地域流通圏や交易範囲、運搬する物の地域的な違いなどが遺跡出土品に明らかに反映していた。この種類の陶器が東アジアで最初に研究上で確認され

話題になった場所は中国であった。1965年に福建省の福州で発掘された劉華（930年没）墓から数点の大瓶が出土した。1975年に刊行された『文物』の報告では中国福建省で作られた陶磁器と記載され、西アジア産という認識は中国人になかった。筆者は福州の出土品がイラク産であるとした論文を1980年2月に発表した（佐々木 1980）、同年外国人に開放されたばかりの福建省に行き、福建省博物館に展示されていた大瓶を見学し、中国製ではなくイラク産であることを確認した（佐々木 1982）。その折り、博物館にはイラク産と伝え、イラク産とした抜き刷りを渡したが反応はなかった。今では中国製という人はいないが、同種類の陶器は日本ではペルシアあるいはイランと展覧会カタログなどに記載され、中国では波斯、伊朗と言う。中国ではペルシア帝国の滅亡後なので、ペルシア湾周辺の国・地域を指すと注釈している（李，他 2003）。私は口頭でもイラクであることを時折伝えているが、まだその説は受け入れられていない、あるいは理解されていない。奈良出土品の新聞報道がペルシア陶器ではなく、イスラーム陶器となったことは好ましいことであった。さらにイラクと記載されることが望まれる。

その後、青緑釉陶器瓶は中国の揚州でかなり多く出土し（周 1985）、海港町ばかりでなく広西省の容県や桂林など広州に繋がる河川交通の要地10遺跡でも出土している（李他 2003）。唐代に市舶司が置かれた海外貿易港の揚州と広州を中心に発見されている。フィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシアなど東南アジアの港町遺跡などでも出土したことが博物館展示品などで確認され、広い範囲の貿易を示す考古学資料として研究者から注目されている。日本に多くの物資を輸入した博多には、他の製品と同じように揚州を経由して運ばれたのであろう。

日本では博多の鴻臚館や太宰府などで青緑釉陶器瓶の小破片が出土し、日本では博多が海のシルクロードの玄関口であることを具体的に証明する物として有名になった。一緒に出土する越窯青磁や長沙窯陶器、邢窯・定窯白磁などの中国陶磁器の年代から、鴻臚館では9世紀の廃棄品であることが判明している。

奈良出土品に類似するものとして2009年7月4日の各新聞に掲載された青緑釉陶器瓶は、筆者がバハレーンのアーリ遺跡で発掘したものである（図3）。



図1 奈良出土青緑釉陶器瓶破片（奈良市埋蔵文化財調査センター撮影）



図2 Jumeirah 遺跡出土青緑釉陶器瓶、8世紀

図3 AA' li 遺跡出土青緑釉陶器瓶、8世紀後半～9世紀



図4 左、Dhaid 採集青緑釉陶器瓶、9世紀

図5 右、Jumeirah 遺跡出土青緑釉陶器瓶、10世紀初

アール遺跡の年代は8世紀後半から9世紀中頃である。遺跡出土品には他の形の瓶もあり、一般的に大形瓶であるが、中形瓶、小型瓶も出土している。いずれも青緑釉を施した当時の一般的な製品である。貼付文が肩部から胴部に見られる大瓶も特徴的な製品であり（図2）、アール遺跡でも出土している。同様の文様がある瓶の破片は中国や鴻臚館でも出土している。小さな瓶もいくつかの

形が見られる。これらと比較すると、奈良出土品は装飾的な貼付文がないもので、肩部に波状文が刻線で描かれた一般的な種類の中型品である。西アジアで発見されれば、装飾や文様の点でとくに珍重されるような種類ではない。単なる生活容器としての瓶である。9世紀になるとコンテナとしての瓶は肩部の丸みが少なくなり（図4）、10世紀初にさらに細くなり造りも雑になる（図5）。西アジアの町や村では液体を運び貯蔵する容器として一般的に用いられた製品である。

4. 瓶の用途や内容物の推測

瓶のなかに何が入っていたか。中に入っていたものが残り、それが発見されなければ、わからない。瓶内に僅かでも痕跡があれば化学分析も可能だが、これまで分析できるような痕跡を残す資料はない。そこで今回もいろんな推測が生まれた。

今のイラクで使用された青緑釉陶器瓶は西アジアでは水、油、シロップ、デーツ汁などの液体を入れるのが主な用途であった。貿易に船出する木造帆船に積まれた瓶には、葡萄酒などの商品が入られたか、あるいは船員の飲み水などが入れられたのであろう。航海中に瓶のなかに入っていた物が商品の場合は中国の港で商品として荷下ろしされる。また、船員が用いた水やシロップであれば、中国の港に着いたときに瓶は空になっていただろう。あるいは航海途中の港で新たに入れられたものが残っていた。中国の商店で瓶ごと内容物が販売されれば、それを購入した奈良時代の日本人あるいは日本人に贈答した中国人が購入した時点でも、西アジアを出港時の内容物が入っていた可能性はまったく無いわけではない。しかし、中国向けの商船に積まれた品は中国で販売されるのが普通である。僅かな数しかない瓶が偶然に日本に運ばれたときは、西アジアから運ばれて来たときと異なる物が入っていたか、あるいは空であったのだろう。中国の酒や漬物などが、一般的な中国の瓶や壺ではなく、数も少なく珍しい、そして質が脆い青緑釉陶器の瓶に中国で入れられた、あるいは船内で入れ替えられたとは推定しにくい。

瓶は中国の港から博多に船で運ばれ、そのうちの大部分の青緑釉陶器瓶は鴻臚館や太宰府に留まったであろう。これまでの発掘で発見される地域は鴻臚館のある博多や太宰府が主で他には周辺地域の久留米であ

る。例外的に1点の瓶が博多から奈良に運ばれたときには、珍しい美しい陶器として、瓶自体の青色が愛でられていたのだろう。当時の日本の瓶は須恵器など灰色一色が主であったから、その色の鮮やかさに目を奪われたと想像される。日本国内で初めて作られた施釉陶器である奈良三彩陶器瓶や緑彩陶器瓶と比べても、青緑釉陶器瓶の色の鮮やかさは際立っている。

したがって、奈良に運ばれた瓶にジャムやバラ水が入っていたという推測も新聞で紹介されたが、そのような可能性は以上の状況推測を考えるときわめて低いと思う。私の説は「何も入っていなかった」である。少なくとも、西アジアを出航したときの商品が入っていたとは思えない。

5. 奈良出土青緑釉陶器瓶の運送ルートと価値

イラクのバスラ港を出港した帆船は、ペルシア湾を通り、商人の本拠地であるシラフに立ち寄ってからアラビア海を季節風に乗って一気に横断し、インド南端からベンガル湾をさらに横断して南シナ海や東シナ海の沿岸に到達したのだろう(佐々木 1987)。唐代の広東は南海貿易の拠点で、アラビア商人も大勢住み、賑わう国際的港町であった。西アジアやインド、東南アジアから運ばれた物資は、中国国内で販売され消費された。そのうち一部の積み荷は揚州や明州(寧波)などから船に積まれて日本にも僅かに運ばれ、博多に達したのであろう。しかし、博多に同時に運ばれた商品の多くは中国産であった。鴻臚館で奈良の役人が政府に持ち帰る品を選び、そのなかに偶然1個の青緑釉陶器瓶が含まれていた。あるいは西大寺に属する僧侶が留学中の中国で土産として購入し、奈良に持ち帰ったのではないだろうか。日本に渡った中国僧侶、あるいは西大寺に関係した中国人、文献に現れるペルシア人が所有して運んだか、日本や中国の商人が多くの物に混ぜて奈良まで運んできたか。

奈良市埋蔵文化財調査センターによると、青緑釉陶器瓶が発見された同じ溝内から「皇浦(甫) / 東□(朝カ)」と底部に墨書された須恵器杯が出土しており、天平8年(736)に波斯(ペルシア)人の李密リミツエイらとともに来日した唐人皇甫東朝を指すと言う。『続日本紀』によると皇甫東朝は天平神護2年(766)に唐樂を奏した功績で従五位下となり、神護景雲元年(767)に雅楽寮員外助がガ列カレウイガウイガイイカ、花苑司正カシノカ

の職に就いていると言う。こうした人々、ペルシア人や中国人が商品として運んできた可能性もある。イラクから中国までは船内の倉庫に一般の商品に混じって積み、博多から奈良までは日本人僧侶や留学生、中国人僧侶や商人あるいはペルシア人まで含めて、彼らの個人的な品として大事に運ばれたか、あるいは奈良までも一般の商品として運ばれたか、等と証明できない想像は膨らむばかりである。

当時すでに盛んとなっていた中国と日本の海上交易で運ばれた、あるいは遣唐使が個人的な品として運んだかもしれない青緑釉陶器瓶は、正倉院に保管されるような聖武天皇の遺品、すなわち儀式に用いられた品々ではなかった。中国まではそれ自体が商品として運ばれたのではなく、貿易に伴って商品を入れた容器・コンテナとして運ばれたものである。ただし、当時珍しい青緑釉陶器瓶が正倉院に保管されたとしてもけっして不思議なことではなかったが、実際はそうはならなかった。

この陶器の出土は、奈良時代の東西貿易の状態あるいは物の動きを示す資料として扱えるだろうか。当時の日本にはなかった色鮮やかな美しい瓶として、個人的にあるいは寺院所属品として保管されたようにも思える。当時の主要な東西貿易路の周辺部に位置する日本では、きわめて珍しい美しい色の瓶と思われたのだろう。しかし、この陶器瓶が奈良から出土したことで、当時の東西貿易に日本が活発に参加していたとか、民間の商人も活発に参加していたと言うのは、まだ難しいことだろう。日本と中国の交易を示す資料としての価値があり、その交易品のなかに西アジアの製品さえ混じることがあることを示していると評価される。また、平城京に運ばれた物資が国際色豊かなものだったと想像させる出土品である。都でさえも民間まで行き渡るほどの量があるものではなかったが、西アジアの製品が日本の都で貴族や一部の僧侶などが目にする物になっていた様子を伝える品である。都では中国の越窯青磁が秘色として持てはやされる直前の時代であり、当時の日本国内の多くの人々は青緑釉陶器瓶の存在さえ知らずに暮らしていた。

京都府久世郡久御山町佐山遺跡から出土した陶器小片1点は、奈良出土品と類似した青緑色陶器瓶の破片である(森島 2010)。同種類の別個体瓶が奈良周辺地域に運ばれていたことがわかり、奈良出土品の評

価に影響を与えるように思える。遺跡は京都市から十数 km ほど南にあり、奈良と京都を結ぶ線上で、京都と大阪方面を結ぶ主要な交通路上に位置している。同種類の青緑釉陶器瓶が 9 世紀頃に京都に運ばれていたことを推測させる発見である。

6. 奈良出土青緑釉陶器瓶をめぐる推測

東アジアで西アジア陶器が出土することが知られたのは 1980 年頃である。福建省の墓から出土した大瓶が有名であり、その一つの例をもとに推論を重ねて 1980 年に私も論文を発表した。日本では 1960 年代に 1 片が鴻臚館から出土し、その後、太宰府政庁跡、福岡市多々良込田遺跡、筑後国府遺跡からも僅かな小片が出土し、発見例が地域的に限られるという状況がわかってきた。1990 年頃に鴻臚館跡の土坑から 18 片の青緑釉陶器瓶片が出土して大きな話題となった。土坑の推定年代は 9～10 世紀であった。その後も僅かな数の破片が出土している。奈良は一度に 21 片(その後 34 片に増える)が発見されたが、その個体数は 1 点のみである。

また、青緑釉陶器瓶のみが出土し、アラビア湾やアラビア海では一般的な組み合わせとなる碗や皿など他の器形や他の種類の陶器である白釉陶器、藍彩陶器、緑釉陶器、ラスター彩陶器などが中国や日本から未だ出土していない。すなわち、中に商品を入れる容器としての瓶のみが運ばれ、それ自体が商品となる陶器は運ばれていない。アラビア海からベンガル湾に入ると、類似の製品を出土する遺跡がほとんど見られなくなるが、マレー半島の 9 世紀の貿易港とされる KoKhoKhao と LaemPho (Bronson 1996) からはアラビア海沿岸と同じ種類が出土している。しかし、東アジア世界では白釉陶器、ラスター彩陶器などの他種類の陶器、小型の碗などが未だ発見されない。この交易圏の違いと歴史的理由はすでに指摘したが(佐々木 1980, 1985)、その状況と貿易システムやネットワークに関する地域圏の歴史的意味は現在も変化していない。今後、例外的に出土することもあろうが、それは例外であり貿易構造を書き換えるものとはならないだろう。

奈良の例も僅か 1 個体の瓶破片であり、これまでと同じ状況を伝えている。その点で今回の発見は歴史的な状況に変化を与えないが、博多よりさらに東に発見

場所が移ったという点、しかも都の奈良であり、使用場所が西大寺であったことがわかることで話題を呼ぶ発見であった。1980 年当時と同じように、30 年後の今、また 1 点のみの一つの例でいろいろと推測してみた。考古学研究では多くの資料を整理分類し、そのデータに基づいて他の資料と比較研究を行うことが基本である。中国、及び奈良の例のように、一つの例のみで空想に遊ぶことができるのは、多くの資料に埋もれ重圧のなかで論文を執筆するより、じつに気軽に楽しい。

文献(刊行年順)

- 佐々木達夫, 1980 「東アジア出土のイスラム陶器」『金沢大学法文学部論集史学篇』27:1-18.
- 佐々木達夫, 1982 「福州にイスラム陶器を訪ねる」『陶説』353:11-14.
- 佐々木達夫, 1985 『元明時代窯業史研究』吉川弘文館
- 周長源, 1985 「揚州出土古代波斯釉陶器」『考古』1985-2, 152-154.
- 佐々木達夫, 1987 「バンポール出土の中国陶磁器と海上貿易」『シルクロード美術論集』吉川弘文館, 225-258.
- 佐々木達夫, 1995 「1911-1913 年発掘のサマラ出土陶磁器分類」『金沢大学考古学紀要』22:75-165.
- Ho Chumei, 1995, Turquoise jars and other West Asian ceramics in China, *Bulletin of the Asia Institute*, 9:19-39.
- Bronson, B., 1996, Chinese and Middle Eastern Trade in Southern Thailand during the 9th century A.D., *Ancient Trades and Cultural Contacts in Southeast Asia*, The Office of the National Culture Commission Bangkok, Thailand.
- 李鏞・封紹柱・周華, 2003 「広西出土の波斯陶及相關問題探討」『文物』2003-11, 71-74.
- 『奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料』No.41, 2009 「はるかイスラム世界からもたらされた壺」
- 佐々木達夫・佐々木花江, 2010 「奈良出土青緑釉陶器瓶」『第 16 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』84-89.
- 森島康雄 2010 『特別展 平城の北・恭仁京ー木津川流域の奈良時代ー』京都府立山城郷土資料館